またあいましょう

六月、役場に勤務していたころ、丁寧な指導を受けた方がお亡くなりになりました。優しい方できちんとしたお仕事をしておられましたし、仕事を離れるとユーモアたっぷりでとんちを交えた会話と素敵な笑顔で周りを和ませてくださるお人柄でした。

お酒をたしなまれる時もその場を明るくしてくださる方で、こんなお酒の飲み方をできるようになりたいなと思ったことでした。

役場を退職されてからは金光寺のためにも大変お力添えをいただきました。総代一期、会計監事は十年以上もつとめて下さいました。総代職を辞される時は「地区の公民館長を」と地元の方から懇願されたため、致し方なく総代職をお辞めになられましたので私はとても残念でした。その後、公民館長職をお辞めになられたので、金光寺の会計監事の就任をお願いしたところ、快くお引き受け下さました。

葬儀の遺影は故人生前を思わせるフランクで優しい笑顔のお写真。今、七日参りで毎週火曜日にその遺影を見ることができます。その度にまたお会いしたいなと思うことです。

親鸞聖人はお弟子に宛てお手紙（『御消息』といいます）をお出しになってます。その中晩年お出しになったお手紙に

「この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまちまゐらせ候ふべし」

とお示しくださっています。

大乗七月号（本願寺出版社発行）に福井県・千福寺ご住職高務哲量先生が隆弘さんは本願寺新報のコラムも担当しておられました。病床で書かれた最後のコラムの一節です。

「〝帰る〟という言葉の本来の意味は、待っている人がいるから帰れるということなのだ。待っている人がいない所へは〝独りで行く〟のだ」

私たちは「いのち」の本当の帰り場所、帰依所を持っているでしょうか。人生が旅に譬えられるのも帰る場所があって、そして隆弘さんのおっしゃるように、待っていてくれる人がいてくださってのこと。帰る所のない旅は放浪とでも呼ぶべきもの、旅とはいえないでしょう。人生をあてどもない放浪で終わらせるのかそうでないのかは、ひとえに帰る世界があるかどうかにかかっているといえましょう。

とお書き（太字部分）になっています。

話は戻ります。生前本山第二十四代即如ご門主からお剃刀を受けられ仏弟子として生きていくと誓われた故人。娑婆の縁尽きられましたが、その時往生即成仏され、今は仏としての活動にいそしまれていることでしょう。

人生の旅を終えられて帰られたところは阿弥陀さまの安楽浄土。故人が必ず待っていて下さるお浄土での再会を期しながら、そのためにもこの命の帰り場所（帰依所）阿弥陀さまのお浄土への救いのご縁を賜り、阿弥陀さまのお慈悲を喜びながら、お念仏・無碍の一道を歩んで行きたいと思うことです。

法語の世界

《原　文》

仏法には、万かなしきにも、かなはぬにつけても、なにごとにつけても、後生のたすかるべきことを思ばば、よろこびおほきは仏恩なりと云々。

（『蓮如上人御一代記聞書』　二百九十八）

《現代語訳》

「仏法においては、愛するものと別れる悲しみにも、求めても得られない苦しみにも、すべてどのようなことにつけても、このたび必ず浄土に往生させていただくことを思うと、喜びが多くなるものである。それは仏の御恩である」と仰せになりました。

《用語の意味》

かなしき……愛する者と別れる悲しみ　愛別離苦
かなはぬ……求めて得られない苦しみ　求不得苦

子どもたちの笑顔のために募金ご協力ありがとうございました

本堂外陣に設置している「子どもたちの笑顔のために募金」の募金箱に皆さま方からたくさんの浄財をお寄せいただき、ありがとうございました。

この募金は国外で貧困に苦しむ子どもたちの支援、国内の子ども食堂や学習支援などの活動、児童養護施設などで暮らす子どもたちのための活用を目的に始められました。

この度、本山重点プロジェクト推進室へ皆様から寄せられました募金の総額「１５，３８３円」を送金し、６月２５日付けで領収証を受け取りました。

今後も本堂外陣に募金箱を置いておきます。

ご協力をお願いします。

夏の早朝、ラジオ体操をご一緒に

鞍岡小学校、鞍楽と話し合いを行い、７月２２日から７月３１日まで（土曜日と日曜日及び雨天時を除く）９日間、金光寺で午前６時３０分ラジオ体操を行うことになりました。対象は１０区内の子供たちですが、よろしかったら１０区内の子供たち以外の方の参加もお待ちしております。

過去の夏休みラジオ体操は体操を終えてからお経を読んでましたが今回はラジオ体操だけです。

夏の早朝、ラジオ体操は如何ですか！